18　「」　─中世の説話集

17年度　中央大学

★　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

　はの国の百姓の子なり。六条の右大臣の御家人なにがしとかや、かの国の目代にて、下りたりけるに、ついでありて、かのにてあるを見るに、有りげなりければ、よび取りて、いとほしみけるを、京に上りてのち、供に具して、大臣の御もとに参りたりけるに、南面に梅の木の大きなるがあるを、「梅とらむ」とて、人の供の者ども、あまたにて打ちけるを、の「あやつ、とらへよ」と、の内よりいひだしたまひたりければ、の子を吹き散らすやうに、逃げにけり。

　その中に童一人、木のにやをらたち隠れて、さし歩みて行きけるを、「⑴にも、さりげなく、もてなすかな」とおぼして、人を召して、「しかしかの物着たる小童、たが供の者ぞ」と尋ねたまひければ、⑵主の思はむことをはばかりて、とみに申さざりけれど、しひて問ひたまふに、力なくて、「それがしの童にこそ」と申しけり。すなはち、主を召して、「⑶その童、参らせよ」とせられければ、参らせけり。

　いとほしみて、使ひたまふに、⑷ねびまさるままに、心ばせ、思ひはかりぞ深く、⑸わりなき者なりける。つねに前に召しひ⑹たまふに、あるつとめて、持ちて参りたりける。仰せに、「かのの棟に、二つ居たるが、一つの烏、頭の白きと見ゆるは、か」と、なきことをつくりて、問ひたまひけるに、つくづくと⑺まぼりて、「しかさまに候ふ、と見⑻たまふ」と申しければ、「いかにも⑼うるせき者なり。世にあらむずる者なり」とて、白河院にらせられけるとぞ。

注　六条の右大臣……源顕房。

　　目代……国司の代わりに任国に行き、国務を代行する者。

　　魂有りげ……才覚、根性がありそう。

　　礫……小石。

　　それがし……誰それ。

　　手水……手や口を清めるための水。

　　車宿……牛車や輿を収納する建物。

問１　傍線⑴「優にも、さりげなく、もてなすかな」にはどのような気持ちが込められているか。もっとも適当なものを左の中から選べ。

Ａ　蜘蛛の子のようにひとりだけさっと逃げた様子に、優秀で察しが良いなと思った。

Ｂ　小石を投げず、逃げ隠れもしなかったところから、のびやかで堂々としていると思った。

Ｃ　「梅を取ろう」と他の子どもに呼びかける声から、何気ない中に優しさがあると気に入った。

Ｄ　木の根もとにそっと隠れてゆっくり歩く姿の、優雅で平然とした態度が素晴らしいと思った。

Ｅ　御簾の中から聞こえる声に紛れて歩いて逃げた様子から、細やかで機転がきく様子を感じた。

問２　傍線⑵「主の思はむことをはばかりて」という心情の説明として、もっとも適当なものを左の中から選べ。

Ａ　自分の供の者も一緒に捕まったのかと心配して

Ｂ　右大臣が激しくお怒りの様子と知り、緊張して

Ｃ　主人は供の者の責任を問われて困るだろうと気遣って

Ｄ　右大臣は何を思っていらっしゃるのかと不安に思って

Ｅ　身なりまでわかっているならば隠しきれないと覚悟して

問３　傍線⑶「その童、参らせよ」と言ったのは誰か。もっとも適切なものを左の中から選べ。

Ａ　肥後守盛重　　　　Ｂ　周防の国の百姓　　Ｃ　六条の右大臣

Ｄ　御家人なにがし　　Ｅ　白河院

問４　傍線⑷⑸⑺の現代語訳として、もっとも適当なものをそれぞれ選べ。

　　　　　　　　　　Ａ　大きくなる

⑷「ねびまさる」　　Ｂ　盛んに働く

　　　　　　　　　　Ｃ　ますます眠る

　　　　　　　　　　Ｄ　年を取りすぎる

　　　　　　　　　　Ａ　分別がない

⑸「わりなき」　　　Ｂ　強引な

　　　　　　　　　　Ｃ　優れた

　　　　　　　　　　Ｄ　美しい

　　　　　　　　　　Ａ　保護して

⑺「まぼりて」　　　Ｂ　じっと見て

　　　　　　　　　　Ｃ　世話をして

　　　　　　　　　　Ｄ　こっそり様子を見て

問５　次の文ア～オのうち、傍線⑹「たまふ」と同じ用法のものに対してはＡ、⑻「たまふ」と同じ用法のものに対してはＢの符号で答えよ。

ア　かしこき仰せ言をたびたびうけたまはりながら、みづからはえなん思ひたまへ立つまじき。（源氏物語）

イ　誰が車ならむ。見知りたまへりや。（枕草子）

ウ　右馬頭の君は、人の妻をぬすみとりてなむ、あるところにかくれゐたまへる。（蜻蛉日記）

エ　この御文見せたてまつりたまへ。（落窪物語）

オ　まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。

（源氏物語）

ア＝［　　　］　　イ＝［　　　］　　ウ＝［　　　］

エ＝［　　　］　　オ＝［　　　］

◎問６　傍線⑼「うるせき者」という評言の内容として、もっとも適当なものを左の中から選べ。

Ａ　顕房の言うことがとわかっていても、よく考えた上で従うのを見て、機転のきく人だと感心した。

Ｂ　顕房の言うことに、本当に御覧になったのかと確認するのを見て、細かい人だから遠ざけようとした。

Ｃ　顕房の噓に全く気づかないふりをしてすぐ返事をしたのを見て、悪知恵の働く人だと評価した。

Ｄ　顕房の出したなぞなぞに対して何とか答えを出そうとする様子を見て、利口な人だとほめたたえた。

Ｅ　盛重をからかうためについた顕房の噓に平然と答えるのを見て、信頼できない人だと幻滅した。

【解答】

問１　Ｄ

問２　Ｃ

問３　Ｃ

問４　⑷＝Ａ　⑸＝Ｃ　⑺＝Ｂ

問５　ア＝Ｂ　イ＝Ａ　ウ＝Ａ　エ＝Ａ　オ＝Ｂ

問６　Ａ

【現代語訳】

　肥後守（藤原の）盛重は周防の国（今の山口県）の百姓の子である。六条の右大臣の御家人のなんとかという者が、その（周防の）国の目代（実際に任地に行って国司の代わりに仕事をする者）として、（任地に）下っていた時に、機会があって、その子（＝盛重）が少年であったのを見かけ、才覚、根性がありそうだったので、呼んで引き取り、かわいがっていたが、都に上った後、お供として（盛重を）連れて、右大臣のお邸に参上した時に、南面（の庭に）に大きな梅の木があるのを、「梅を取ろう」と言って、（目代の）供の者たちが、たくさん小石を（投げて）打ったのを、（邸の）主人（右大臣）が「あいつらを、捕らえよ」と、御簾の内からおっしゃったので、（供の者たちは）蜘蛛の子を散らすように、逃げたのだった。

　その中で一人の少年が、木のもとにそっと隠れてから、（落ち着いて）歩いて行ったのを、（右大臣は）「優雅で、平然と、振る舞うものだな」とお思いになって、人をお呼びになって、「これこれの着物を着ている少年は、誰の供の者か」とお尋ねになったので、（その少年の）主人（目代）が（責任を問われると）思うかもしれないことを気遣って、（尋ねられた人は）すぐにはお答えしなかったが、（右大臣が）強いてお尋ねになるので、どうしようもなくて、「誰それ（目代）の（使っている）少年でございます」と申し上げた。すぐに、（右大臣はその少年の）主人（目代）をお呼びになって、「その少年を、（私に）仕えさせよ」とおっしゃったので、（目代はその少年を右大臣に）差し出したのだった。

　（右大臣は）かわいがって、お使いになっていたが、（盛重は）大きくなるにつれ、心遣いも、思慮も深く、優れた者になった。（右大臣は）いつも御側近くにお呼びになって使っていらっしゃるが、ある日の早朝、手や口を清めるための水を持って参上した。（盛重に右大臣が）おっしゃったことには、「あの牛車の小屋の棟（屋根の一番高い部分）に、烏が二羽止まっているが、一羽の烏は、頭が白く見えるが、見間違いか」と、ないことを作り上げて、お尋ねになったところ、（盛重は）つくづくじっと見て、「そのとおりでございます、と拝見します」と申し上げたので、（右大臣は）「極めて賢い者だ。世間に認められることになる者である」と言って、白河院に（盛重を）差し上げなさったと（いうことである）。